

## 大学院生の研究

### 博士後期課程 3 年次 福元 健之

一般に、ヨーロッパでは、19 世紀を通じて、医学や統計学の発展とともに空間の衛生学的な管理が強化され、そこには健康な国民をつくり、国家の力を高めるといった目的があった。男性なら屈強な労働者、あるいは兵士として、女性なら夫や子どもの健康に配慮する妻や母としての役割が期待された、とされます。私は、従来では西欧を中心に研究が進められてきたこの主題に関して、ロシア領ポーランドに焦点を当て、グローバルに共有された同時代性と、東欧における社会の変化を明らかにしたいと思っています。

これまでの研究では、社会主義とナショナリズムとの対立関係でポーランド近代史を捉える従来の視角からめれ落ちてきた、自由主義的潮流に属する医師知識人の役割を明らかにしてきました。ワルシャワの外に広がる「地方 *provincia*」という空間で医療に従事した医師にはユダヤ人やドイツ人も多く、彼らの間では、多民族的な社会を維持する力学が強く作用していたと考えられます。ここには、国民国家のための兵士や労働者、市民をつくる、という目的とは緊張関係をもみつけることができるのです。現在は、諸帝国の間で積み重ねられた試行錯誤が、第一次世界大戦を経てどのようにポーランド国家に引き継がれるのか、という問題意識から、既に存在する国家の枠組を前提に展開されてきた日本の福祉史・貧困史に新しい知見を提供することに取り組んでいます。また、この作業の過程で、医師が大戦中に不足した食糧や薬品などの物資の分配方法を模索する史料を読みながら、現代における医療資源の分配ルールはどのように決定されているのか、ということにも関心をもつようになりました。

### 博士後期課程 3 年次 安平 弦司

現在、オランダのティルブルフ大学に留学しています。同大学に提出する博士論文のテーマは、17 世紀ユトレヒトにおけるカトリックの生存戦略です。自己紹介代わりに、今関心のあることを羅列気味に書いていきます。

技術的次元。この原稿を書いている 2018 年 6 月現在、博士論文執筆真只中なのですが、そうした中で最も関心を持っているのは、論文執筆のようなアウトプット作業において、いかにして有限性を受け入れる（あるいは意図的に導入する）か、完璧主義を「ほどほど」にしておくか、ということです。有限化の理念・技術双方に関して、千葉雅也『勉強の哲学』は非常に示唆的でした。

ローカルヒストリーの次元。博士論文の内容を有限化していく中で、かなり切り落とさなければならぬのが、聖堂参事会の問題です。一文でこの問題の難しさを示唆するならば、宗教改革後、ユトレヒトの 5 つの聖堂参事会は教会からは分離したが（宗教的権限の喪失＝世俗化）、社団としては存続し、多大な社会経済的特権を持った聖堂参事会員には、プロテスタント俗人もカトリック聖職者・俗人も選出されるようになった、ということになるのでしょうか。この問題に関しては、いずれしっかりと扱う機会を持ちたいと思います。

比較の次元。近世蘭英の「マイノリティ・カトリシズム」を比較する試みは、まだ本格的にはなされていませんが大変魅力的です。蘭英両国の（若手）研究者の中に、志を同じくする仲間を数名見つけていますので、近い将来コラボしたいと目論んでいます。また、現代世界のマイノリティ（例えばヨーロッパにおけるムスリム）と近世オランダのカトリックを比較することにも大きな関心を寄せています。昨年、現代ヨーロッパの宗教的マイノリテ

ィの自己表象を扱う人類学・社会学の学会に招待して頂きましたが、こうした分野横断的な対話は今後も続けていきたいと思っています。

### 博士後期課程 3 年次 酒嶋 恭平

私は古代ギリシア史を研究しており、学部生時代は古典期（前 479-前 323 年頃）のアテナイに存在した陶片追放という制度をテーマに卒業論文を執筆しました。大学院進学後はヘレニズム時代（前 323 年頃-前 30 年頃）の歴史を専門的に勉強しております。現在は、(1) 後継者戦争期（前 323-前 281 年頃）におけるポリスと後継者たち（ディアドコイ）との関係からみるヘレニズム世界の形成過程 (2) ヘレニズム時代のアテナイ社会の変容と政治への影響、という 2 つのテーマを軸に研究を進めています。また、主に碑文史料を用いていますので、碑文学も勉強しています。

古代ギリシアの民主政治に対する興味が、私の研究の根幹にあります。とりわけ、エリートと民衆が様々な外圧に晒されながらどのように相互交渉を行ったのか、民衆の政治参加はどの程度実現し、彼ら・彼女らの意志はどの程度政治に反映されたのか、といった政治的意思決定とその過程について、特に興味を持っています。ヘレニズム時代は、諸王やローマといった強力な外部勢力がポリスを取り囲む一方で、相対的な貧富の差の拡大によって名望家がポリス政治を牛耳るようになる時代と言われています。このような時代の政治の在り様を解明する中で、ヘレニズム時代の民主政とは何ぞや、ひいては、古代ギリシアの民主政とは何ぞや、ということを考えていきたいと思っています。

### 博士後期課程 3 年次 浮網 佳苗

修士課程から現在に至るまで、近代イギリスにおける生活協同組合をテーマに研究をしてきました。長時間労働や低賃金、格差拡大、食品偽装、環境破壊など工業化により生じた諸問題に対して人々はいかに向き合ってきたかということに関心があり、イギリスの生協運動がこうした取り組みの元祖だと考えています。生協といえば、19 世紀前半のロバート・オーウェンによる試みが有名ですが、現在のような生協のしくみが本格的に広がったのは 19 世紀後半以降でした。私の研究はまさにその 19 世紀後半から 20 世紀初頭までの運動を扱っています。

現在考察をすすめているのは、生協と消費の関係です。特に、店舗の消費者の大半であった女性組合員が消費についてどのように考え、実践していたのかに興味があります。19 世紀末のイギリスでは、小売業の拡大に伴って、食品を中心とした商品の劣悪な質と、小売店舗の従業員の劣悪な労働条件が問題になっていました。こうした状況に対して、生協は消費行動を通じて改善しようとしたのですが、その際大きな役割を果たしたのは女性組合員でした。すでに 1883 年に、運動内での女性の地位向上を目指して、女性協同組合ギルド Women's Co-operative Guild (WCG) が結成されていたのですが、この組織を中心に、女性組合員は店舗で販売される商品の品質チェックや生協ブランド製品の販売促進に力を入れるなど、消費者として品質改善に貢献しました。また、WCG は女性組合員に対して店舗の利用時間を早めるよう呼びかけた結果、消費者の意識変化を促し、店舗従業員の労働時間短縮を実現しました。この動きは生協運動の拡大に伴い、一般企業へも波及していったと考えられます。その意味で、生協はエシカルな消費の先駆けといえるかもしれません。

最近では、国内における生協の現場とのつなが

りも大事にし、経済学や農学分野の生協研究者や、生協職員、生産者との交流から、たくさんの研究のヒントを得ています。

#### 博士後期課程 1 年次 藤田 風花

異なる宗教・宗派間のコミュニケーションに関心があり、京都府立大学の学部生時代から現在まで、東地中海に位置するキプロス島の事例を中心に研究しています。キプロスは古代から現代にいたるまで、何度も支配者の交代を経験してきました。中近世にかぎっていえば、ビザンツ帝国・リュジニャン朝・ヴェネツィア・オスマン帝国と、さまざまな宗教を奉ずる支配者のもとに、住民の大多数を占めるギリシア語話者の正教徒が存在していました。

そのなかでも、とくにヴェネツィア支配期(1473-1571)を研究対象としています。修士論文では、キプロスの事例から、正教世界における対抗宗教改革の影響について論じました。そこでの考察をおして明らかになったことのひとつに、13 世紀中葉に成立した教会合同的体制が、16 世紀後半のオスマン帝国による征服にいたるまで、この島の宗教的秩序を規定していたことがあります。この体制は、13 世紀中葉、リュジニャン朝のもとでカトリックの教会制度がキプロスに導入されるさいに生じたさまざまな問題に決着をつけるため、教皇アレクサンデル 4 世によって公布された『キプロス教書』にもとづいて成立したものでした。現在は、このカトリック教会と正教会の共存体制の成立過程と意義を明らかにすることに取り組んでいます。

これまでに幾度となく「キプロスはヨーロッパなのか？西洋史の対象範囲なのか？」と尋ねられたことがあります。むしろ、このような疑問を生じさせるような地域であるということにこそ、複数の宗教文化圏が交錯する場としてこの島がたどっ

てきた歴史的経緯が反映されているような気がしています。

#### 博士後期課程 1 年次 吉田 瞳

アウトサイダーとしての楽師に興味を持ち、歴史学の勉強を始めました。卒業論文では中世における楽師の社会的地位の上昇と放浪の関係性について、修士論文では「シュタットファイファー」と呼ばれる参事会お抱え楽師の都市における社会的機能について研究しました。現在は主な興味の対象を「楽師」から「音」に移し、中世期の神聖ローマ帝国・帝国都市ニュルンベルクを事例として、音と中世都市の公共善ないし公共性についての研究に取り組んでいます。

中世の音というと、典礼音楽が連想されがちですが、私はそういった中世「音楽」よりもむしろ、塔守(下級治安役人)の鳴らす警報や教会の鐘の音といった「信号音」に関心を持っています。といいましますのも、識字率が高くなかった中世都市において、音も用いたコミュニケーションやそのための規則は、都市の秩序を律するために重要な役割を担っていたといえるからです。ニュルンベルク参事会の発展とともに、どのような音がどう都市統治に利用され、都市の公共と関わっていったのか、それが現在の最大の関心事といえます。

また、中世には鐘の音が聞こえる範囲を都市の支配領域とする考え方もあり、それについては1996 年にトリーア大学の A. ハーファーカンブ教授(当時)が、鐘と信仰共同体および中世都市の公共性についての試論を提示しています。この論文では都市共同体において鐘の音が果たした役割が、共同体における公共性と結びつけて論じられましたが、肝心の「中世の公共性」の具体的な定義や条件については特に言及されていません。私の現在の関心は、上述のとおり音と都市統治の関係です

が、これは音と中世都市における「公なるもの」の関係とも換言できます。ハーファークンプ教授の議論を参考にしつつ、私の研究も最終的に「中世的公共性」の検討に繋げることが出来たら良いと考えています。

#### 修士課程 2 年次 小山田 真帆

古代ギリシア史を専攻し、前 4 世紀アテナイの社会について研究しています。特に、当該社会のセクシュアリティに関心を持って研究に取り組んでいます。

前 451/0 年のいわゆる「ペリクレスの市民権法」制定以降、アテナイでは市民身分である両親から生まれた者にしか市民権が認められておらず、生まれた子を市民とするには両親が正式な結婚で結びついた市民身分の男女であることを示す必要がありました。しかしその一方で、現在の婚姻届や出生届に相当するような、夫婦関係や親子関係を公的に証明する制度は十分に整備されていませんでした。アテナイ社会が抱えていたこの矛盾は以前から指摘されており、ある人物を市民として承認するプロセスが社会の中でどのように進行していたのかを明らかにするため、共同の儀礼や市民の理想像、市民イデオロギーについて多くの研究がなされてきました。こうした研究蓄積を踏まえ、少なくとも法規定上は血縁が重視されていたアテナイにおいて、性規範が市民共同体の存立を支える重要な役割を担っていたのではないかと私は考えており、市民のセクシュアリティに注目して研究を進めています。

現在は修士論文を準備しており、主に法廷弁論を用いて「市民であること」や市民に相応しい姿がどのように性的行動と結び付けられていたかを分析しています。この分析から、市民に求められた性規範、特に市民が売春に従事することに対する認

識を明らかにできるのではないかと考えています。

修士論文提出後も、売春や男性同性愛関係に対する当該社会の眼差しについて考察しながら、アテナイ市民共同体のあり方について研究していきたいと考えています。国内の古代ギリシア史研究では、セクシュアリティを正面から扱ったものはまだ多くなく、これから解明していくべき課題も多いのではと感じています。日本の古代ギリシア史研究のさらなる進展に貢献できるよう、研究に励んでいきたいと思っています。

#### 修士課程 2 年次 竹中 絢音

私は古代ローマ史、特に共和政期を対象に研究を行っています。ローマ共和政については政治史の分野に限っても長期にわたる研究の蓄積が存在し、現在の研究はこれまでの寡頭政モデルや民主政モデルの大きな流れと議論を踏まえ、何を具体的な分析対象とするか、どのような構図を描くかは非常に多様なものとなっています。その中であって、共和政における民衆の様々な役割や影響力をどのように見做し位置づけるかは、共和政の政治への考察に欠くべからざる視点であると言えるでしょう。現在私は民衆と政治家の関わりを大きな軸に、その相互の関わりがいかに当時の有力者・有力家系のあり方を左右したか、彼らの相関のなかで求められ見出される政治家の理想像とは何か、といったことに関心を置いています。卒業論文で扱ったスキピオ・アエミリアヌスの政治手法についての議論をさらに深め、発展させるものとして、引き続き共和政期に有力であったコルネリウス・スキピオ家を事例にとり、民衆との駆け引きを主眼に当該家系の興隆や特色を分析することを目指しています。

修士課程 2 年次 中辻 柚珠

私の専門は近現代チェコ・ナショナリズムとプラハ美術界の関係についてです。従来のナショナリズム研究では、ナショナリストらの活動がいかに関与したか、そしてその活動がいかに関与に受容されたかに焦点が置かれてきました。しかし近年、チェコ・ナショナリズム史家の Tara Zahra が「ナショナル・インディファレンス」論を提唱したことで（2008 年）、ナショナリズムへの無関心が運動の展開に果たした役割を検討する向きが生じています。この議論を足掛かりに、私は、ただ運動に対して受動的になるのではなく、運動を自分たちの活動の弊害と捉え、能動的に応えた人々の意義・役割を検討するようになりました。こうした視点から研究するにあたり、ナショナリズムのような思想上の全体主義が最も弊害となりうるのは表現の場にいる人々ではないかと考え、当時プラハの画壇の中心にあった「マーネス造形芸術家協会」（1887-1956, 1990-年）を考察対象に選びました。現在は修士論文執筆に向け、本協会の機関紙『自由な潮流』（1896-1949 年）の言説に見て取れる彼らの思想を追うことで、本協会の結成の意義を考察しています。ここまでの調査では、本協会の結成の動機が、先行する芸術様式への対抗心というよりも、当時のプラハの有力者層への反発心に由来することが分かってきました。この有力者層批判の意味を、当時のナショナリズムの文脈と照らし合わせて考察し、修士論文にまとめる予定です。

修士課程 2 年次 平野 春花

学部時代は奈良女子大学に在籍しており、18 世紀イギリスの急進派の思想を主に研究していました。京都大学に進学し、修士課程の現在は、近代イギリスにおける「書く」行為について、18 世紀後半から 19 世紀にかけて書かれた「自伝」を中心に

研究を進めています。

近代には、階級やジェンダーを問わず、多くの人が自分が自分に関する記録、いわゆるライフ・ライティングと呼ばれる、日記や自伝、手紙などを残しています。当該時期は、文学史上、コウルリッジやワーズワスなどのロマン派の詩人たちが、「私」や「個人」を重視し、使い古されたレトリックから解放された、より自由な文章表現を追求した時代でもありました。そして、そのような時代における歴史的な特徴は、作者（叙述行為の主体）の層が、知識人のみならず、労働者階級や女性、貧民や奴隷などへと大幅に拡大し、彼らに関する大量の自伝が書かれたことにあります。このような市井の人々までが、自らの人生を顧み、それを叙述し残そうとした動機とは一体何だったのか。彼らは叙述行為を通じて、どのように自らの人生と向き合ったのか。そしてこの現象は、歴史的にどういった意味をもったのか。当時の思想や社会背景とも向き合いながら、これらを明らかにしていくことが、現在の目標です。

修士課程 1 年次 石田 和生

私は中世のフィレンツェにおける人的紐帯について研究しています。この研究は中世期を通して共和制が重視されたフィレンツェという都市国家において、どのような人的紐帯が存在し、その紐帯がどのような役割を果たしたかということを考察するものです。この人的紐帯というキーワードには家族関係や親族関係、友人関係や隣人関係といった様々な人間関係を含んでいます。この研究の意義はこれまで「家族関係」、「友人関係」というように個別的な文脈で研究されてきた様々な人的紐帯をより包括的、かつ互いに密接に関連する有機的なものとして評価出来ることであると私は考えています。

こうした研究主題の下、学部の卒業論文では政治の寡頭化が進み、人的紐帯がより少数の有力者に収斂していく中世後期を対象として、フィレンツェ市民の覚書史料を用いて人的紐帯のあり方に考察を加えることを試みました。特に史料の著者の父親が亡くなった時の記述に注目し、人の死によって表れた人的紐帯の変化についても考察しました。しかし、卒業論文では限られた人的紐帯しか取り上げることが出来ず、読解史料も数が少なかったという反省がありました。それ故、現在は取り上げることが出来なかった人的紐帯に関する書籍を読みつつ、卒業論文で使ったもの以外の覚書史料や遺言書といった新たな種類の一次史料の調査・選定を行っています。また研究の進捗とは別に、読解した史料の中に現れる、当時のフィレンツェ市民が自身の周りに張り巡らされた人的紐帯をどのように評価していたかについて新たに興味を持っています。この主題に関してもこれからさらに深めていくことが出来れば良いと考えています。

#### 修士課程 1 年次 蔵戸 亮太

私はプトレマイオス朝期エジプトを研究対象としています。アレクサンドロス以降の時代については「ヘレニズム」概念を提唱したドロイゼン以来多くの議論がなされてきました。その中でプトレマイオス朝については、その制度や王朝祭祀、ギリシア系住民と現地民との関係などに焦点が当てられて研究が行われてきました。また王権が既存の伝統を踏襲したことでも知られています。その一方で、従来のエジプト文化において重要であった諸要素の果たした役割に関しては、その多くが看過されてきたように思われます。その例としては、アレクサンドロスが参詣したことでも知られるアメン神や、従来の王権理論の主要素の 1 つとされるマアトという概念が挙げられます。それ故に私

は在地の文化・伝統から見たプトレマイオス朝という点に関心を持っており、またそれと関連して現地民とギリシア系住民の関わりについても関心を持っています。後者については、以前には双方の人々は分離しきっていたと語られていましたが近年では両者の間の結びつきや同化が指摘されています。プトレマイオス朝の性質を知る上では、このような在地の文化・住民という視点も必要なのであると私は考えています。研究においては、碑文や文献史料に加えて、エジプトにおいてとりわけ多く出土しているパピルス史料が考察対象として存在します。また前述したような関わりを知る上では、プトレマイオス朝の前後の時代、即ち末期王朝期とローマ支配期にも目を向けることにも価値があると考えています。

#### 修士課程 1 年次 近田 淳志

私が現在関心を持ち、研究しているのは、1905 年の第一次ロシア革命から第二次世界大戦勃発直前までのポーランドの政治史です。特に戦間期に成立した権威主義体制である「サナツィア体制」に注目し、ポーランドにおける権威主義体制とは何だったのかについて関心を寄せて研究しています。この場合のポーランドは、現在のポーランド共和国の領域だけでなく、現在のウクライナ西部やベラルーシ西部、リトアニアの一部も含まれます。

卒業論文では、サナツィア体制が成立した要因を、第一次世界大戦やパラミタリーの経験による「野蛮化」から考察しました。この時に注目したのは、ポーランドの「建国の父」とされるユゼフ・ピウスツキが率いたパラミタリーです。彼らが大战後に組織したピウスツキ・グループという政治的な集団が野蛮化した原因の一つであり、サナツィア体制が成立した要因の一つであると考察しました。

現在の課題は、以下の通りです。ポーランドの野蛮化を考える上で第一次世界大戦の経験や、それに続く国境を巡る戦争の経験を軽視した事と野蛮化した原因をピウスツキやピウスツキ・グループだけに求められないという点です。これらの反省点を修士論文に生かしていきたいと考えています。

最後に現在の関心と今後の展望について述べたいと思います。現在の関心は、サナツィア体制が独裁色を強めていく過程で生じたナショナリストや右翼政治団体の過激化、急進化です。特に、ユダヤ人への暴力やナチスの突撃隊の様なパラミタリーを所持していた国民急進派運動(RNR)に注目して研究を続けています。さらに、ウクライナのナショナリストの過激化や急進化についても注目し、ウクライナ民族主義者組織(OUN)についても考察していきたいと考えています。これらの事を考察することで、サナツィア体制がどのような政治体制で、どのように変化していったかについて研究していきたいと考えています。

#### 修士課程 1 年次 林 祐一郎

専攻は近世プロイセン史で、卒論ではフランスからの信仰難民、ユグノーの受け入れ政策を扱いました。

専攻動機を振り返ると、高校時代の思い出が蘇ります。もともと歴史に興味があったのですが、この頃は近世以降のドイツの軍歌や戦史に少しばかり詳しくなり、趣味を一人で消費するだけの停滞した生活を送りました。そこでフリードリヒ大王という歴史的人物や、ハフナーの歴史書『プロイセンの歴史』との出会いを経て、プロイセン史学を志します。

最近でこそドイツが移民国家として認知されるようになりましたが、その祖の一つであるプロイセンも外国人を受け入れることで国力を高めてき

た歴史を持ち、とりわけユグノーは特筆すべき位置を占めます。彼らの中には先進的な技術や文化を媒介した人々のみならず、軍人や政治家として登場した人物たちもいます。19 世紀の作家フォンターネや、メルケル内閣で内相を務める政治家デメジエールもそうしたユグノーの子孫です。

ドイツでは古くから亡命ユグノー研究がなされ、最近ではユグノーがプロイセンの発展に大きく寄与したという歴史観が相対化される一方で、ユグノー自身の揺れるアイデンティティに光を当てる議論が目立ちます。この問題意識は移民・難民統合を巡る社会的背景と関わっていると考えられますが、この主題に迫るには亡命者たちに対する現地人の態度を考察することも必要です。

例えばユグノーの中には軍人もおり、当時の軍事文献によく使われたフランス語の知識や、故国で受けた高度な軍事教育もあって、軍で高位を占めた者も少なくありません。為政者はこれを歓迎する一方で、ルサンチマンを抱く現地の将校や兵士もいました。多様な出自の人々で構成される軍隊という組織で、ユグノーはどう受け入れられたのでしょうか。私の関心は、巡り巡って軍隊へ戻ってきたようです。

#### 修士課程 1 年次 山内 健太

バルカン半島(あるいは南東ヨーロッパ)の歴史を研究対象としており、特に、バルカン半島に対して、文化的、歴史的な一体性を与えているもののひとつとして、オスマン帝国の支配という共通の過去に関心があります。時代的には、オスマン帝国による 500 年にわたる長い支配のなかでも、その後期にあたる、様々な問題が顕在化した 17 世紀から各地で民族運動が展開された 19 世紀後半頃までを対象にしています。

以上のような関心にもとづいて、卒業論文では、

バルカン半島各地で共通してみられたハイドゥックと呼ばれる山賊について扱いました。彼らはいわば「山の無法者」でしたが、時には義賊的な存在として、あるいは「民族の英雄」として語られる存在でした。具体的には、19 世紀ブルガリアにおいて独立運動とも関わった一人のハイドゥックを取り上げ、彼の自伝の考察を通じて、多様なハイドゥックのあり方の一例を提示することを目指しました。

現在は、対象をハイドゥックに限定せずに、上述の関心に基づいてオスマン帝国下のバルカンについて広く勉強しています。とりわけ、様々な目的を持ってバルカンを旅した人々によって書かれた旅行記に着目して、バルカンを生きた人々の諸側面を考察したいと考えています。同時に、旅行記の書き手にも注目することで、「旅」に関する歴史や、バルカン以外の地域との関わりという点からも見ていきたいと考えています。